On the Directionality of Language Change: A Case of the Functional Shift of *Afraid**

(*afraid* の意味機能推移からみた言語変化の方向性)

大村光弘

1　はじめに

この論文の目的は，英語の形容詞の1つであるafraidとその補部の発達が，通言語的に観察される一般的発達過程を経ていることを明らかにし，これを言語理論に基づいて分析・説明することである。議論の一端を先取りして，afraidの発達過程に関する興味深い点を観察しておこう。

(1) She had been afraid that she would faint or be sick, . . .

(1994, Sheldon, *Nothing Lasts Forever*, 46)

(2) I'm afraid I don't have much luck with men.　(*op. cit.*, 164)

(1)のafraidは，補文の表す事態に対する主語の恐れ・不安を表している。これに対して，(2)のafraid（正確には，I'm afraid）は，補文の表す事態が主語（＝話し手）にとって歓迎できない内容であることを合図しているものの，その事態に対する恐れや不安といった感情を表していない。仮に日本語を充てるならば，「残念ながら」とか「あいにく」とでもなろう。さて，3節において明らかとなることだが，afraidはまずof＋名詞句をしたがえるようになり，遅れて(法助動詞を含んだ）that節をしたがえるようになる。

(3)Be ye　affrayed of me that am youre freend?
　be you afraid　of me that am your　friend
　'Are you afraid of me, who am your friend?'

(1393-1400, Chaucer, *CT* (Skeat), The Nonne Preestes Tale, 465)

(4)He was afrayed that Ionathas wolde not suffre him.

'He was afraid that Jonathas would not suffer him'

(1535, Coverdale, *1 Macc*. xii. 40 — OED)

このことから，(1)の用法が(3)の用法から派生したと想定できるかもしれない。すなわち，恐れの要因・対象が，名詞句によって表される個体（individual）から，that 節によって表される事態へと拡張されたと想定できるかもしれない。問題は，(2)の用法の発達である。こちらは，はるかに複雑な様相を呈している。なぜなら，afraid に情緒的な意味合いはあるものの，それは二次的な意味で，believe や think などの思考動詞に似た意味が一次的となっているからである。詳細な議論は 4 節に委ねるが，(2)の (I'm) afraid の用法の発達は，真偽判断的意味合いの付帯 (afraid が法助動詞を含まない，直説法で標示される that 節をとり始めたことに起因する）と，afraid の情緒的意味の希薄化の帰結であると主張する。

2 afraid の意味と補部形式の間の対応関係（予備段階として）

言語変化はときに，2 つ以上の言語学的側面にわたって進行することがある。このような性質の変化は，どれか 1 つの言語学的側面にだけ言及することで説明することはできない。afraid の発達についても，その機能的変化が，補部の意味的・統語的特性と密接に結びついている。2 節では，現代英語における afraid の用法を補部形式に基づいて分類し，3 節で行う歴史的調査と考察のための骨子としたい。

afraid の意味と補部形式の間の対応関係を探るための参考資料として，Longman Dictionary of Contemporary English (LDCE) と Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (OALDCE) の 2 冊を使うことにする。これら 2 冊の英英辞書は，信頼のおける学習辞書として定評のあるものである。LDCE と OALDCE における afraid の項目を調べると，それぞれ①から④に示した用法が記載されている。

I) LDCE の記述

① full of fear, frightened (of) . . .

(5) Don't be afraid of the dog.

(6) I was afraid to go out of the house at night.

(7) They were afraid that the police would catch them.

② unwilling to do something, especially because of worry about possible results:

(8) I didn't tell her because I was afraid of upsetting her.

(9) Don't be afraid to ask for help.

③ polite sorry for something that has happened or is likely to happen:

(10) I am afraid (that) I've broken your pen.

(11) "Are we on time?"
"I'm afraid not."

④ *I'm afraid* is often used as a polite phrase when you are giving someone unpleasant information:

(12) I'm afraid I have some rather bad news for you.

(13) We're afraid we're unable to offer you the job.

II) OALDCE の記述

① be afraid (of) . . .: frightened (of) . . .

(14) There's nothing to be afraid of.

(15) Are you afraid of snakes?

② be afraid of+gerund, be afraid+*that*-clause: doubtful or anxious about consequences

(16) I was afraid of hurting his feelings.
(= I was afraid that I might hurt his feelings.)

(17) She was afraid of waking her husband.
(She didn't want to wake him, perhaps because he was ill or in need of sleep.)

③ be afraid to+infinitive: worried, filled with apprehension

⑱She was afraid to wake her husband.

(She feared that he might be angry with her.)

⑲Don't be afraid to ask for my help.

(Don't hesitate to ask for my help.)

④ be afraid (that), (*that* usually omitted): a polite formula used with a statement that may be unwelcome):

⑳I'm afraid (that) we shall be late.

㉑I'm afraid I can't help.

これら2つの英英辞書の記述から分かるように，現代英語のafraidは多義的である。興味深いのは，どの補部形式をしたがえるかによって，afraidの担う意味が異なってくることである。たとえば，of＋名詞句をとると，「～に恐怖を抱いて(frightened)」という意味になるが，of＋動名詞節，to不定詞節やthat節をとると，「不安・心配で（worried, anxious)」という意味が可能となる。さらに，afraidが1人称主語とともに現在時制で用いられた場合，発話の語気を弱めたり，特定の発話行為を限定する機能を果たすことがある。このときの(I am/We are) afraidは，恐怖や不安・心配といった感情を表すのではなく，対人的効果を意図した社交辞令的要素として用いられる。これらのことを考慮して，afraidと特定の補部形式との共起関係をまとめると，㉒に示したように記述できる。

㉒

パタン1　単独で用いられるか，またはof＋名詞句を伴う場合：恐れて：(5)，(14)，(15)

パタン2　to不定詞節を伴う場合：（ある行為におよぶことを）恐れて，心配して：(6)，(9)，(18)，(19)

パタン3　of＋動名詞を伴う場合：(ある事態が生じることを)恐れて，心配して：(8)，(16)，(17)

パタン4　that節を伴う場合：（ある事態が生じることを）恐れて，心配して：(7)

パタン5　that節を伴う場合：（語気を弱めるのに用いて）残念ながら，

あいにく：(10), (11), (12), (13), (20), (21)

(22)の分類は，暫定的であるが故にきめが荒いものであるが，次節で歴史的考察を加えるにあたっての凡例としては十分なものである。

3 歴史的観点からの調査・考察

3節では，The Oxford English Dictionary (OED) の記述を検証しながら，パタン1からパタン5のそれぞれを調査および考察する。

3.1 単独で用いられるか，またはof＋名詞句を伴う場合（パタン1）

afraidが単独で用いられるか，またはof＋名詞句を伴う場合をOEDで調べてみると，どちらも14世紀の例から記載されている。

(23) Þe Kyng was alle affraied.
the king was wholly afraid
'The king was wholly frightened.'
(1330, R. Brunne, *Chron.* 16 — OED)

(24) He þat of þe white beres So bremli was afraied.
he that of the white bears so furiously was afraid
'He was greatly afraid of the white bears.'
(1350, Will. *Palerne*, 2158 — OED)

OEDの初出例が実際の初出を意味するわけではないが，おおよその目安にするには十分である。念のために，カンタベリ物語(The Canterbury Tales (Skeat編))で用いられているafraidの用法について調査したところ，パタン1に該当する例(単独で用いられている例が2例，of＋名詞句をとっている例が2例)は見つかったが，パタン2からパタン5に該当する例は見つからなかった。このことは，全ての補部パタンの中で，パタン1が最も基本的な形式であることを示唆している。

afraidはもともと，他動詞affray ('frighten, alarm') の過去分詞であった。それが，恐れを感じている心理状態だけを表すように特化されたことで，16世

紀以降 affray から独立した語彙項目として位置づけられるようになった (OED: 222)。したがって，中英語の afraid のなかには，(25)のように，行為受け身の解釈が可能なものがある。

(25)As man that was affrayed in his herte.
as man that was afraid in his heart
'As man who was frightened at heart'
(1393-1400, Chaucer, *CT* (Skeat), The Nonne Preestes Tale, 458)

中英語期の afraid が動詞的であったことに関連して，of＋名詞句についても若干の注釈が必要であろう。中英語期では，前置詞 of が動作主 (Agent) を標示することがあったことから，(26)や(27)で用いられている of＋名詞句も動作主的で，したがって，補部ではなく付加部ではないかという疑問が生じるかもしれない。

(26)(=(3)) Be ye affrayed of me that am youre freend?
be you afraid of me that am your friend
'Are you afraid of me, who am your friend?'
(*op. cit.*, The Nonne Preestes Tale, 465)

(27)This lady wex affrayed of the soun, . . .
this lady became afraid of the sound
'this lady was frightened of the words, . . .'
(*op. cit.*, The Tale of the Man of Lawe, 563)

しかしながら，少なくともカンタベリ物語に見られるこれらの例に関して，of 句が動作主（すなわち，意図的に行為を遂行する者）として解釈されるとは考えにくい。本稿では，(26)や(27)で用いられている afraid は，Grimshaw (1990) の用語でいうところの心理的因果関係を表す動詞 (psychological causative) の受動態であると考える。この考え方が正しいとすると，(26)や(27)において，主語には経験者項 (Experiencer) が，of 句には主題項 (Theme) が付与されていることになる[1]。

3.2 to 不定詞節を伴う場合（パタン2）

OED において，パタン2に該当する例は，16世紀初頭のものから記載されている。

(28)Moses couered his face, for he was afrayed to loke vpon God.
Moses covered his face for he was afraid to look upon God
'Moses covered his face, for he was afraid to look at God.'
(1535, Coverdale, *Ex.* iii. 6 — OED)

(29)They were affraid even to crie.
they were afraid even to cry
'They were afraid even to cry.'
(1580, Sidney, *Arcadia* iii. 317 — OED)

前節で述べたように，カンタベリ物語の中にパタン2に該当する例は無かった。また，パストン書簡集（Paston Letters（Davis 編））を調査したところ，やはりパタン2に該当する例は見あたらなかった。このことから，afraid が to 不定詞節を従えるようになったのは，16世紀頃であったと推定する。

前節で，パタン1が afraid の補部形式の基本であることを見た。このことから，パタン2の発達は，恐れの要因・対象が，名詞句によって表される個体だけでなく，to 不定詞によって表される行為にも拡張された結果であると想定できる。ただし，その発達過程については，若干の補足が必要であろう。議論を具体化するために，意味と補部パタンの点で afraid と酷似していた afeard を考察してみよう。afeard も afraid 同様，当初は節補部をとることはなかった。実際，カンタベリ物語（Skeat 編）に見られる afeard は，単独で用いられている（6例）か，of 句を伴って現れている（2例）かのどちらかである。しかしながら，afeard は，中英語期には早くも，that 節をしたがえ始める（3.4.1節で，この変化を扱う）。(30)は，ヘルシンキコーパス（The Diachronic Part of the Helsinki Corpus）の中英語第3期（1350-1420）からの引用である。

(30)For, he es afered þat he sal be peryst.
for he is afeard that he shall be perished
'for he is afraid that he shall be perished'

(*The Pricke of Conscience* — HC)

(31)I am aferd Þat . . . he wyl sett hys gode to morgage . . .

I am afraid that he will set his goods to morgage

'I am afraid that . . . he will set his goods to morgage . . .'

(1448, *PL* (Davis) I, 222)

さらに，パストン書簡集の中には，afeard が that 節をとっている例だけでなく，to 不定詞をとっている例も見ることができる。

(32)for here thei arn aferde to telle soche as be reportid.

for here they are afraid to tell such as be reported

'for here they are afraid to tell such as reported'

(1445, *PL* (Davis) I, 28)

afeard が，中英語期に既に to 不定詞補部をとっていたにも関わらず，afraid は，16 世紀になるまで to 不定詞補部をとることがなかったという調査結果を踏まえると，afraid の to 不定詞補部の発達において，意味が酷似していた afeard の補部パタンが，少なからず影響を与えたであろうことは否めない。たとえば，afeard の補部パタンからの類推によって，afraid が to 不定詞補部をとるようになったとも考えられる。

ここで，afeard の発達に関して，2 つの疑問を提起したい。1 つは，「that 節補部の出現に to 不定詞補部の出現が続くことに，何らかの必然性があったのか」という疑問である。そしてもう 1 つは，「to 不定詞そのものは古英語期から存在していたにも関わらず，中英語末期になって afeard の補部位置に現れるようになったのは何故か」，という疑問である。

afeard の to 不定詞補部の出現であるが，これは，to 不定詞節が that 節に対する簡略版として用いられ始めた現れであると考えたい。すなわち，主節主語と同一指示である補文主語を，語彙的 NP によって表すのを避けるために，to 不定詞補部が用いられ始めたと想定する。この変化は，(33 a) から (33 b) への変化として言い換えることができる。(33 b) は義務的コントロール (obligatory control) の構造形である。

(33) a. they are afeard that they will tell such as reported.

b. they$_i$ are afeard [[PRO$_i$ to tell such as reported]]

that 節を基本形式とし，to 不定詞節を二次的・派生的形式とする考え方は，前者が古英語期において既に一般的な補部形式として位置づけられていたのに対して，節構造（すなわち，IP 構造）を含んだ不定詞が，15 世紀頃から出現し始めたとする論拠に基づいている。たとえば，大村(1998)は，Kageyama(1992)及び Tanaka (1994) の基本的主張を支持し，15 世紀頃から to 不定詞の内部構造が（34 a）のような PP 構造から（34 b）のような IP 構造に変化し始めたと主張する。

(34) a. [$_{PP}$ [$_{P}$ to] [$_{VP}$ V-enne . . .]]

b. [$_{IP}$ Spec [$_{Infl}$ to] [$_{VP}$ V . . .]]

もし，不定詞の意味上の主語に課せられる義務的コントロールを成立させる構造形が，節構造（ここでは，PRO が生起するための［Spec,IP］位置と統率（government）に対する障壁（barrier）である CP）を要求するならば，(34)に示した to 不定詞の構造変化は，(33 b)の補部パタンが利用可能となるための前提条件となっていたはずである。実際，これら 2 つの変化は同時期に起こっている。

IP 構造を含む不定詞の意味機能に関して，大村(1998：209)が提示している重要な仮説がある。それは，IP 構造を含む統語範疇だけが，命題を指し示す資格をもつとする仮説である[2]。ここでいう命題とは，意識主体がいだく思考・疑問・願望などの心的態度の対象となる事態記述であり，真理値（truth value）を持つ。もし，afeard の to 不定詞補部が，that 節に対する簡略形として導入されたとすると，その to 不定詞補部もまた命題を指示対象とするはずである。したがって，IP 構造を内在していなくてはならない。

ここで afeard の補部形式の発達についての議論をまとめてみよう。of＋NP の補部形式のみを許していた afeard が that 節補部をとるようになったことは，恐れの対象が名詞句によって表される個体から，that 節によって表される事態に拡張された結果であると想定した。実際，中英語期には，この意味的拡張を可能にする統語装置（すなわち，that 節）が利用可能であった。つぎに，afeard が to 不定詞節を補部にとるようになったことは，that 節が表していた

意味の一部を，より単純な統語形式で代用するようになった現れだと提案した。この新しい補部形式の出現は，to 不定詞の内部構造の変化がもたらした，新しい統語装置（すなわち，IP 構造を内在した to 不定詞）が利用可能となったことから導かれた。

3.3 of＋動名詞を伴う場合（パタン3）

パタン3の補部形式に議論を進め，ここでも OED の記述から始めよう。当該パタンを示す事例は，18 世紀のものから記載されている。

(35)I was affraid of trampling on every traveller that I met.

'I was afraid of trampling on every traveller that I met.'

(1727, Swift, *Gulliver* ii. viii., 174 — OED)

しかしながら，動名詞を補部にとる事例を調査したところ，OED の記述よりも早い時期から，この補部形式が現れていたことが明らかとなった。

(36)I am parlously afraid of being in love . . .

(1677, Behn, *The Rover* (Summers), I, v, i, 100)

(37)Why, my wife was afraid of losing this world . . .

(1678, Bunyan, *Works*, The Pilgrim's Progress, 112)

(38)I was afraid of grieving you too much, . . .

(1722, Defoe, *Moll Flanders*, 44)

(36)や(37)の実例から判断して，afraid が動名詞補部をとり始めた時期は，17 世紀頃であったと想定しておく。

ここで，動名詞節（すなわち，IP 構造を含む動名詞）の発達を扱った大村（1997）の骨子を振り返ることが有益であると考える。大村（1997）は，もともと完全な名詞であった動名詞が，節の持つ特性を獲得していくことによって，名詞的範疇の内部に節構造を埋め込んだ二重構造を発達させたと主張する。もう少し具体的に言うと，この変化は（39 a）から（39 b）への構造変化であり，（39 b）が確立した時期は 16 世紀頃と推定される。

(39) a．$[_{DP}$ D $[_{NP}$ N $]]$

b．$[_{DP}$ D $[_{IP}$ Infl $[_{VP}$ V . . .$]]]$

ちなみに，(38)の動名詞節の内部構造を明示すると，(40)のようになる。

(40)I was afraid of [$_{DP}$ D [$_{IP}$ PRO$_i$ Infl [$_{VP}$ grieving you too much]]]

大村（1997）のこの分析は，IP構造を含む統語範疇だけが，命題を指し示す資格をもつとする大村（1998）の仮説と共に，afraidが動名詞節を補部としてとるようになった事実に一つの説明を与える。つまり，16世紀頃に（39 b）の内部構造を確立したことによって，命題を指し示す資格を獲得した動名詞節は，afraidの補部位置に生起して，心配や不安の対象となる命題を表すようになったと説明できる。

3.4 that節を伴う場合（パタン4・パタン5）

OEDにおいて，afraidがthat節を補部にとっている例は，16世紀のものが最も古い。

(41)He was afrayed that Ionathas wolde not suffre him.

'He was afraid that Jonathas would not suffer him.'

(1535, Coverdale, *1 Macc*. xii. 40 — OED)

カンタベリ物語（Skeat編）やパストン書簡集（Davis編）を調査したところ，当該パタンを示す事例は発見できなかった。このことから，afraidがthat節を補部にとり始めたのは，16世紀頃だったと判断できる。

3.2節において，補部パタンと意味においてafraidと類似していたafeardを扱った。そこで，afeardが，中英語期にthat節やto不定詞節を取り始めていたことを見た。カンタベリ物語（Skeat編），パストン書簡集（Davis編），シェークスピア喜劇・史劇・悲劇（The First Folio of Shakespeare（Hinman (1968)）を調査してみると，中英語期では，afeardの方がafraidよりも生起率が高いことが分かる。

(42)

		パタン1	パタン2	パタン4	合計
カンタベリ物語	afeard	8	0	0	8
	afraid	4	0	0	4
パストン書簡集	afeard	15	6	11	32
	afraid	3	0	0	3
シェークスピア	afeard	19	5	5	29
	afraid	22	10	10	42

(数値は該当例の数)

このことは，中英語期において，前者が後者よりも優勢であったことを示唆している。しかしながら，中英語期に優勢であった afeard も，18 世紀以降 afraid によって次第に駆逐されていく (OED: 209)。3.1 節で既に述べたことだが，afraid は，他動詞 affray ('frighten, alarm') の過去分詞であったのが，恐れを感じている心理状態だけを表すように特化されたことで，16 世紀以降 affray から独立した語彙項目となった。以上の史実から判断すると，状態の意味を強め，結果として affray から独立した語彙項目となったことが，afraid が 16 世紀以降一般化されてきた最も大きな要因だと思われる。

3.4.1 法助動詞を含む that 節

afraid や afeard が補部にとる that 節を観察すると，1 つの事実に気づく。それは，(30)-(31)，(43)-(44)のように，that 節中に法助動詞が用いられていることである。

(43)I am aferde yt wyll brest.
I am afeard it will brest
'I am afraid it will brest.' (15c, *Mankind* — HC)

(44)and Þerfor I am a-ferd Þei wyl not deny it . . .
and therefore I am afeard they will not deny it
'and therefore I am afraid they will not deny it'
(15c, Kemp, *The Book of Margery Kempe* — HC)

古英語では，恐怖を表す述語が that 節を取った場合，その that 節は仮定法

(subjunctive) で標示されるのが普通であった。

(45)Ic me onegan mæg Þæt me wraðra sum wæpnes ecge
I me dread may that me hostile some weapon edge
for freondmynde feore beneote.
for amorous intention life deprive(SUBJ)
'I dread that some hostile men, longing for you, would slay me with a sword.' (*Genesis A* (Doane), 1829-31)

中英語期に生じた屈折の水平化 (leveling of inflection) に伴い，that 節中の仮定法標示が，法助動詞によって代用されるようになったことは，よく知られている。このことから，法助動詞を伴って afraid や afeard の補部位置に現れる that 節は，古英語期に(45)の that 節が担っていた指示機能(すなわち，恐れの感情を引き起こす要因となっている命題内容を指し示す機能) を継承する形式であることが導かれる。さらに，次節との関連で注意しておきたいのは，afraid や afeard が法助動詞を含む that 節をとったとき，その that 節の表す命題内容は，未実現の可能事態を表していることである。すなわち，意識主体が恐れを感じるとき，その恐れの対象となっている命題内容は，これから実現しうる可能性のある事態を表すのである。

3.4.2 直説法で標示される that 節

前節で，afraid や afeard が，法助動詞を含む that 節をとる事例を扱った。つぎに，これらの述語が，法助動詞を含まない，直説法で標示される that 節をとる事例に目を向けてみよう。該当例はパストン書簡集の中に見ることができるが，(46)のような 15 世紀の例と，(47)のような 19 世紀の例では，that 節の指し示す命題の性質が異なることに注意しなくてはならない。

(46). . . and summe men ar a-ferd that he is seek ageyn.
and some men are afraid that he is sick again
'. . . some men are afraid that he is sick again.'
(1455, *PL* (Davis) II, 127)

(47)I am afraid you are disappointed in me, Bessie.

(1847, Brontë, *Jane Eyre*, 106)

(46)では，主節主語が，現在時における事態（すなわち，彼が再び体調をくずしているであろうこと）について，心配・懸念している様子が報告されている。ここでは，that 節中の be 動詞が現在形で標示されており，これによって，現在時における可能事態が表現されている。一方，(47)では，that 節が直説法で標示されている点に違いはないものの，主節主語（＝話し手）は，現在時における事態（すなわち，聞き手が自分を見て，その容姿にがっかりしているであろうこと）を推し量っている。つまり，(47)では，主節主語（＝話し手）が，補文命題が真であるという判断を下していることになる。afraid の意味機能の点から(46)と(47)を捉え直すと，次のように述べることができる。(46)の afraid は，補文命題に対する主語の命題態度（すなわち，不安や懸念）を表している。一方，(47)の(I am) afraid は，推定判断の対象となっている命題内容が，話し手にとって歓迎できない内容であるという情緒的保留態度を合図している。4.2 節において，afraid の that 節補部が直説法で標示されるようになったことに起因して，afraid の意味機能が，(46)のように不安や懸念といった命題態度を表す意味機能から，(47)のように推定判断に対して情緒的保留条件を付け加える意味機能へと変化したと提案する。

直説法で標示される補部節をとる afraid の中には，命題態度に関わるものの他に，話者の発話態度に関わるものもある。たとえば，(48)の(I'm) afraid は，これから聞き手にとって不快な情報を伝えなければならないことに対する，話し手の保留態度を合図している。

(48)I'm afraid I have some unfortunate news for you.

(1995, Sheldon, *Nothing Lasts Forever*, 164)

このように，afraid が that 節を補部にとるようになって以来，afraid の意味機能に様々な変化が生じてきたことがわかる。これらの変化は，その性質上，統語的側面から分析・説明することができない。したがって，次節において，問題となっている変化を意味論的側面から分析・説明する。

4 意味の漂白と主観化

4節では，一般的意味原理に基づいて，前節で概観したafraidとその補部の発達を分析する。この分析の結果，afraidが主観化（subjectification）と意味の漂白（semantic bleaching）を経て，意味機能面での抽象化を受けてきたことが明らかとなる[3]。分析のために用いる枠組みとして，(49)に示した階層意味論モデルを想定する。

(49)発話：［発話態度［命題態度［命題（事態描写）］］］　(cf. 中右（1994））

(49)は，発話というものが3つの異なる階層から構成され，それぞれの階層が，固有の指示対象をもつことを意味している。命題は，事態を言語表現によって描写した客観的領域である。命題態度は，話し手が発話時点において，命題内容の真理値に対してとる何らかの心的態度のことである。発話態度は，様々な談話世界の構成成分に関わるので，一言で定義するには困難を極める。したがって，本稿の議論に関連する部分について述べれば，話し手が発話時点において，命題内容の提示方法（すなわち，発話様態）に対してとる，何らかの心的態度となる[4]。命題態度と発話態度は共に，話し手の主観的領域に属し，こちらは語彙的に顕在化する場合としない場合がある。

4.1 命題内要素から命題態度を表す要素へ

3節で論じたように，afraidの補部の歴史的発達は，of＋NPのパタンを起点として，that節補部やto不定詞補部に拡張されていく。本稿では，この変化が，言語表現の主観化の一例であるという提案をする。この提案を具体化するために，中右（1994）の意味での「モダリティ（modality）」という概念を導入する。中右（1994：42-46）は，モダリティとは，①発話時点における，②話し手の，③心的態度であると定義し，この3要素を全て備えたものが典型的モダリティであると述べている。さらに，モダリティを形成するこれら3要素には重要度の違いがあり，心的態度，話し手，発話時点（瞬間的現在）の順で優先順位が下がるとしている。

NP補部をとるafraidを含む文の中で，最もモダリティらしい表現を含む文

は，(50)のような文である。

(50)*I'm afraid* of a snake.

(50)の I'm afraid は，話し手と心的態度を含むが，特別な文脈が与えられない限り，発話時点（瞬間的現在）を含まない。すなわち，(50)は，発話の瞬間における話し手の恐怖を表すというよりも，話し手が普段からヘビを苦手としているという，状態描写的意味を伝えると解釈される。このことは，(50)の文全体が，(49)における命題部門に属することを意味している。

つぎに，afraid が that 節をとっている(51)と，to 不定詞節をとっている(52)を考察してみよう。

(51)*I'm afraid* that I might hurt his feelings.

(52)*I'm afraid* to hurt his feelings.

(51)や(52)の I'm afraid は，特別な文脈が与えられなくても，発話時点（瞬間的現在）における話し手の心的態度（命題態度）を表すことができる。すなわち，これらは，自然な解釈の下で，典型的モダリティ表現として機能しうるのである。このように，afraid が that 節や to 不定詞節をとるようになったことは，自然な文脈において，典型的モダリティを表す afraid が出現するようになったことを意味する。人は，間接的に他人の命題態度を知り得た場合を除き，自分自身の命題態度しか表明することができない。この意味で，命題態度は，本来主観的なものである。したがって，(51)や(52)のような，命題態度を表す afraid の出現は，afraid の意味機能が事態描写に関わる客観的領域から，命題態度に関わる主観的領域へ拡張したことを表している。

3節において，恐れの感情を引き起こす要因が，個体から命題に拡張された結果が，to 不定詞節・that 節・動名詞節といった節補部の発達であると論じた。仮に，命題を恐れの感情を喚起させる実体として捉える心理的プロセスが，メタファーによる拡張プロセスであるならば，命題態度を表す afraid の出現（言い換えるならば，afraid の主観化）は，メタファーによる意味拡張によって引き起こされたことになる。

(53)実体は，恐れを喚起させる。

↓ ←―――― 命題は実体である（メタファー）

命題は，恐れを喚起させる。

主観化の駆動要因として，メタファーに基づく意味拡張を示唆したが，これは，考えられる説明方法の一つにすぎない。

典型的モダリティ表現としての afraid の出現は，afraid の意味機能が，以前よりも抽象的なものへと変化したことも意味している。実際，この変化と同時的に，afraid の語彙的意味も希薄化・抽象化しているようである。たとえば，afraid が(50)のように名詞補部をとったときには，主語が個体に対して抱く恐怖を表すが，(51)や(52)のように節補部をとったときには，主語が事態に対して抱く恐怖を表す場合もあれば，主語が事態に対して抱く不安や心配を表すこともある。不安や心配の意味の発生は，恐怖の意味の希薄化または抽象化の現れとみなすことができる。言い換えれば，afraid が命題態度を表す意味機能を得たことで，意味の希薄化・抽象化が生じ，結果として不安や心配の意味が可能となったのである。

4.2 推定判断を限定する情緒的モダリティの発達

つぎに，議論を(54)―(56)のような文に移してみよう。

(54)I'm afraid, my small Acquaintance, you have been staying that swinging stomach you boasted of this morning.

(1677, Behn, *The Rover* (Summers), I, iii, i, 47)

(55)(=(2)) I'm afraid I don't have much luck with men.

(56)(=(47)) I am afraid you are disappointed in me, Bessie.

これらの文において，主節（I am afraid）は，話し手の気遣いや懸念を合図するものの，この情緒的意味合いは副次的なもので，主要な命題態度は話し手の推定判断である。この(I am) afraid の意味機能は，(57)の譲歩節に相当すると考えられる[5]。

(57)*Although this may be unpleasant* (*to me/you*), I (dare to) think X

although 節は，話し手の推定判断に先行し，命題内容 X が，聞き手または話し

手にとって歓迎できない内容であることを合図する。

本稿では，afraid の that 節補部が直説法で標示されるようになったことに起因して，afraid の意味機能が，(58)（＝(46)）のように不安や懸念といった命題態度を表す意味機能から，(56)のように推定判断に対して情緒的保留条件を付け加える意味機能へと変化したと提案する。

(58). . . and summe men ar a-ferd that he is seek ageyn.
and some men are afraid that he is sick again
'. . . some men are afraid that he is sick again.'
(1455, *PL* (Davis) II, 127)

本稿の提案する仮説を検証するために，変化の過渡期に位置づけられる例を観察してみよう。

(59)I am afear'd Being in night, all this is but a dreame, . . .
I am afeard being in night all this is but a dream
'I am afraid, being in night, all this is but a dream.'
(1595, Shakespeare, Romeo and Juliet, II, ii, *First Folio*, 676)

(60)I am affraid His thinkings are below the Moone, not worth His
I am afraid his thinkings are below the moon not worth his
ſerious conſidering.
serious considering
'I am afraid his thinkings are beow the moon, not with his serious considering.'
(1613, Shakespeare, King Henry the Eighth, III, ii, *op. cit.*, 575)

(59)は，ロミオ（キャピュレット家の庭園）とジュリエット（キャピュレット家の2階バルコニー）がお互いに愛の言葉を交わす中，乳母に呼ばれたジュリエットが一旦退場した直後の，ロミオの台詞である。ここでは，「信じられないような嬉しい事態だが，夜ということもあって，まさか夢ではないだろうか」という，ロミオの不安が表現されている。ロミオ自身は，補文の指し示す命題内容が真であることを推し量っているわけではない。一方，(60)では，ウルジー枢機卿が政務関係の書類と間違えて，自分の財産目録（ここには，枢機卿の位に似

合わない，贅沢を謳歌していることを示す内容が記載されていた）を国王に提出したという背景があって，国王（ヘンリ８世）が，「ウルジー枢機卿が，世俗的でためにもならないことを思案しているようだ」という判断を下している。

現在生じているかもしれない可能事態が，不安の対象から推定判断の対象へと推移した理由として，２つの要因が考えられる。一つは，不安の対象であれ推定判断の対象であれ，that 節補部が同じ文法手段，すなわち，直説法現在で標示されていたことである。もう一つは，真偽判断の根拠となりうる話し手の知識の存在である。たとえば，ヘンリ８世が(60)を発話するにあたって，財産目録という判断の根拠があったことは既に述べた。(56)に関しても，話し手（Jane Eyre）は，自分が見栄えが良くないという認識に基づいて，聞き手が自分の容姿についてがっかりしているだろうことを推し量っている。

現在生じているかもしれない可能事態が，不安の対象から推定判断の対象へと推移するとき，不安・懸念の命題態度は，推定判断に一次的命題態度の地位を譲り，これを限定する機能を果たし始める。これは，afraid のもつ情緒的意味合いが，推定判断に対する保留態度として機能できたためだと考えられる。

ここで，(57)の意味構造を想定する一つの根拠を提示したい。(I'm) afraid は，(61)に示したように，肯定極性値（affirmative polarity value）に焦点を置いた文照応や，(62)に示したように，否定極性値（negative polarity value）に焦点を置いた文照応を許す。ここでもやはり，I'm afraid は，推定判断に対する情緒的保留態度を合図している。

(61)"Is there — something more, sir?"

"I'm afraid so," said Mr. Carter gravely.

(1922, Christie, *The Secret Adversary*, 175)

(62)". . . You cannot throw any light upon the tragedy?"

"I'm afraid not . . ."

(1933, Christie, *Murder on the Orient Express*, 87)

このような文照応は典型的に，think，believe，expect 等の思考動詞に見られる現象である。

(63)"Exactly. And your uncle seemed quite as usual?"

"I think so." (1926, Christie, *The Murder of Roger Ackroyd*, 52)

(64)Can any one of us be completely and entirely eliminated?" He paused.

"I think not." (1939, Christie, *And Then There Were None*, 105-6)

このことから，(61)や(62)の(I'm) afraid は，think や believe などの思考動詞と同様の意味構造を含んでおり，したがって，文照応に関して同じ振る舞いを示すと結論される。

最後に，推定判断を限定する(I'm) afraid の出現時期を特定しておきたい。意味変化の時期を特定するのは大変困難であるが，(54)や(65)のような実例から判断して，推定判断を限定するモダリティ表現(I'm) afraid の出現は，17 世紀後半頃であったと想定しておく。

(65)"This is all out of the way, son," says the mother. "If you are in earnest you are undone." "I am afraid not," says he.

(1722, Defoe, *Moll Flanders*, 40)

4.3 発話態度を限定する用法

最後に，(66)や(67)のような例を分析してみよう。

(66)(=(48)) I'm afraid I have some unfortunate news for you.

(67)"I'm afraid I'm going to have to fail you," he said unhappily.

(1995, Sheldon, *Nothing Lasts Forever*, 112)

(66)や(67)にある(I'm) afraid は，命題態度を表すモダリティ表現でもなければ，推定判断を限定するモダリティ表現でもない。実際は，発話態度を表すモダリティ表現である。このことは，発話動詞を補って，(68)のような言い換えが可能なことからも明らかである。

(68)a. I'm afraid to say that I have some unfortunate news for you.

b. I'm afraid to say that I'm going to have to fail you.

ここで，(57)に倣って，発話態度を表す(I'm) afraid の意味機能を明示すると，(69)の譲歩節に相当するものとして記述できる。

(69)*Although this may be unpleasant to you*, I (dare to) say X

(69)の譲歩節は，直後に続く話し手自身の発話行為を限定し，発話内容について

の保留条件を言い添える機能を果たしている。発話態度を表す意味機能は，命題態度を表す意味機能や命題態度を限定する意味機能と比べて，より抽象的・機能的であると言える。実際，発話態度を表す(I'm) afraid は，極めて形式的に（すなわち社交辞令的に）用いられることがよくある。つまり，話し手の側に，聞き手への配慮や共感の気持ちが無くても，語気を和らげる目的で用いられることがしばしばある。この意味でも，afraid の意味は以前よりも希薄になっていると言える。

発話態度を表す(I'm) afraid は，特定の条件下で，命題態度を限定する(I'm) afraid から機能的に推移することで出現したと推測される。これは，話し手が，これから提示しようとする命題内容に対して，ある種の語用論的効果（たとえば，勧告，非難，拒絶など）を意図するとき，(I'm) afraid をその語用論的効果に対する保留条件として機能させることが可能であったためである。たとえば，(70)の読みは曖昧（ambiguous）で，文脈によって，(71 a) と (71 b) の二通りの解釈が可能である。

(70)I'm afraid you are mistaken there.

(71)a. I'm afraid to think that you are mistaken there.

b. I'm afraid to say that you are mistaken there.

この曖昧性は，発話態度を表す(I'm) afraid の出現時期を特定することを困難にしている。現段階で見つけることができた該当例のうち，文脈上(71)で示したような曖昧性を生じさせない事例は，19 世紀のものが最も古い。

(72)I am afraid I never shall do that. (1847, Brontë, *Jane Eyre*, 82)

5 結　語

本稿では，afraid とその補部形式の歴史的発達過程を記述するとともに，これを意味的・機能的側面と形式的・統語的側面の 2 つの視点から分析した。まず afraid とその補部形式の発達を記述する目的であるが，これは，当該発達が(73)に概略した発達であったことを明らかにすることで達成された。

(73) of＋名詞句 → ① that 節 → ①-1 法助動詞を含む
→ ①-2 直説法で標示される
(afraid の意味の希薄化/afraid の主観化)
(afraid の意味が希薄化/I am afraid の意味機能が抽象化)
→ ② to 不定詞節
→ ③ of＋動名詞節

(73)は，名詞句補部をとるパタンを基本として，3種類の節補部（that 節，to 不定詞節，動名詞節）が追加されたことを表している。このことは，恐怖の対象が名詞句によって表される個体から，節によって表される事態へと拡張されたことを意味している。この意味的拡張を統語構造に反映させるためには，IP 構造を含む統語範疇を利用しなくてはならない。なぜなら，IP 構造を含む統語範疇だけが命題を指示対象とすることができるからである。that 節は当然この条件を満たすものとして議論の対象外としたが，to 不定詞節と動名詞節についても，これらが IP 構造を含むような変化を受けたという先行研究に基づいて，afraid の補部となり得た論拠を提示した。

本研究の特徴は，afraid の意味機能における変化を，階層意味論モデル(49)に基づいた一連の認知的過程として捉えていることにある。たとえば，afraid が節補部をしたがえるようになったことで，典型的モダリティ表現を含む I am afraid＋①/②/③の各パタンが可能となった。ここで見逃してはならないのは，afraid の意味機能が事態描写に関わる客観的領域から，モダリティに関わる主観的領域に拡張されたことである。本稿では，この変化を主観化の1つであるとみなした。さらに，命題態度を表す I am afraid は，特定の条件下で，命題態度を限定する機能を獲得した。さらに，命題態度を限定する I am afraid は，話し手の発話態度を限定する機能も獲得した。これら2つの変化において，I am afraid は，段階を経るごとに，より抽象的・機能的要素へと変化している。このことは，(I am) afraid の意味機能における発達の過程が，主観化と抽象化（または，意味の漂白）という言語変化の一般的傾向を示していたことに他ならない。

注

* この論文を査読して下さった編集委員の先生方から，文体・表現方法に始まり論の展開に至るまで，貴重で且つ有益なアドバイスを頂いた。さらに，田中智之先生から，パストン書簡集に関する資料の提供と，不定詞の発達に関わる文献の紹介など，有益なアドバイスを頂いた。記して感謝の意を表したい。

1 Grimshaw (1990, Section 4.3.1) は，心理的因果関係を表す動詞を用いた受け身が形容詞的受け身 (adjectival passive) の解釈のみで，動詞的受け身 (verbal passive) の解釈を持たないことを論証している。また，具体的な項構造として (i) を想定している。

(i) *frighten* ((x (y))) → *frightened* (R<=x>(x (y)))

Grimshaw (1990: 125)

矢印の左側は，心理的因果関係を表す動詞の項構造を表している。x が経験者項で，y が主題項である。この種の動詞は外項 (external argument) を持たないが，受動化すると，Grimshaw が R と呼ぶ外項が付加される。矢印の右側は，受動化後の項構造を表しており，外項 R は，心理的因果関係を表す動詞の内項 (internal argument) x を束縛 (bind) することによって，これと同定されている。

2 大村 (1998) では，例外的格標示 (Exceptional Case-marking) 構文を中心に取り扱いながら，不定詞が IP 構造を確立したことによって，不定詞節が命題態度を表す動詞の補文に生じるようになったことを論証している。

また，IP 構造を含む統語範疇だけが命題を指し示す資格をもつとする仮説は，「ある構造が命題を指し示すためには，その構造が IP を内在していなくてはならない」，ということを述べたものであり，これらは必要十分条件ではない。

3 本稿で用いる主観化の概念は，「ある要素が，以前よりも主観的な機能を発達させる」ことを意味している。主観化とは，変化の結果に重点が置かれた用語であり，それ自体が独立した認知プロセスであることを意味しない。より重要なのは，主観化を生じさせる要因である。主観化に対する駆動要因として，メタファーによる意味拡張や，類推，会話を円滑に進めるための対人的効果の意図などが考えられる。

4 この意味機能を含め，話者のモダリティと談話に関わる他の要素との関わりに関しては，中右 (1994) を参照されたい。

5 代案として，モダリティ表現(I am) afraid は，推定判断の命題態度とこれを限定する保留態度からなる，複合的モダリティ表現であるとして扱うこともできる。

引用文献

Brontë, Charlotte. 1847. *Jane eyre*. Rpt. in 1996. London: Penguin Books.

Bunyan, John. 1678. The pilgrim's progress. In *The complete works of john bunyan*. 85-245. Pub. in 1873. Philadelphia: Bradley, Garretson and Co.

Chaucer, Geoffrey. 1393-1400. The canterbury tales. In Walter Skeat (1912).

Christie, Agatha. 1922. *The secret adversary*. Berkley edition 1991. New York: Berkley Books.

Christie, Agatha. 1926. *The murder of roger ackroyd*. 1993 edition. London: HarperCollinsPublishers.

Christie, Agatha. 1933. *Murder on the orient express*. HarperPaperbacks edition 1991. New York: HarperPaperbacks.

Christie, Agatha. 1939. *And then there were none*. Berkley edition 1991. New York: Berkley Books.

Davis, Norman, ed. 1976. *Paston letters and papers of the fifteenth century I, II*. Oxford: Oxford University Press.

Defoe, Daniel. 1722. *The fortunes and misfortunes of the famous moll flanders*. Rpt. in 1960. London: J. M. Dent and Sons.

Doane, A. Nicolaus. 1978. *Genesis a: a new edition*. Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.

Grimshaw, Jane. 1990. *Argument structure*. Cambridge, Massachusetts. : MIT Press.

Hinman, Charlton. 1968. *The first folio of shakespeare*. New York: W. W. Norton and Company.

大村光弘 (Ohmura, Mitsuhiro). 1997.「動詞的動名詞の歴史的発達について」, 人文論集 48-1, 静岡大学人文学部, 325-343.

大村光弘 (Ohmura, Mitsuhiro). 1998.「対格付き不定詞構文の歴史的発達と意味機能」, 人文論集 49-1, 静岡大学人文学部, 197-215.

Kageyama, Taro. 1992. AGR in old english to-infinitives. *Lingua* 88: 91-128.

Sheldon, Sidney. 1994. *Nothing lasts forever*. London: HarperCollinsPublishers.

Skeat, Walter, ed. 1912. *Chaucer: complete works*. Rpt. in 1973. London: Oxford University Press.

Summers, Montague, ed. 1967. *The works of aphra behn I*. New York: Phaeton Press.

Tanaka, Tomoyuki. 1994. On the realization of external argument in infinitives. *English Linguistics* 11: 76–99.

中右実（Nakau, Minoru）. 1994.『認知意味論の原理』，大修館，東京。

Synopsis

On the Directionality of Language Change: A Case of the Functional Shift of *Afraid*

Mitsuhiro Ohmura

The main purpose of this paper is to show that the development of *afraid* and its complements underwent some general tendencies such as subjectification and semantic bleaching, and to explain it on the basis of the hierarchical model of the utterance in (1).

(1) [speech attitude (SA) [propositional attitude (PA) [proposition (P)]]]

(1) indicates that the utterance consists of the three hierarchically ordered layers. *P* is the linguistic description of a state of affairs. *PA* is the speaker's psychological attitude towards *P* at the moment of speech. *SA* is, for example, the speaker's psychological attitude towards the manner of speech at the moment of speech. I will argue that the semantic functions of *afraid* changed from part of *P* to *PA*, from *PA* to a modifier of *PA*, and then from a modifier of *PA* to *SA*.

The development of the complements of *afraid* can be schematized as follows:

(2) (of+) NP → *that*-clause with a modal
→ indicative *that*-clause
→ *to*-infinitival clause
→ (of+) gerundive clause

(2) shows that three types of complement clauses were added to the most basic complement type, that is, (of+) NP. Consequently, they gave rise to a typical modality expression *I am afraid* which expressed the speaker's psychological attitude towards a proposition at the moment of speech.

(3) a. *I'm afraid* that I might hurt his feelings.
b. *I'm afraid* to hurt his feelings.
c. *I'm afraid* of hurting his feelings.

It is very interesting that (*I am*) *afraid* which took a *that*-clause underwent further semantic changes, one of which can be exemplified by (4).

(4) Jane Eyre: I am afraid you are disappointed in me, Bessie.

(1847, Brontë, *Jane Eyre*)

Afraid in this example does not express Jane's emotional reaction to the proposition, but modifies her primary propositional attitude (*i. e.*, her assertive judgement) by expressing her unpleasant feeling to it. This function of (*I am*) *afraid* is comparable to the *although*-clause in (5).

(5) *Although this may be unpleasant*, I (dare to) think . . .

I will propose that in (4), the semantic function of *I'm afraid* has shifted from expressing a propositional attitude to mitigating the force of assertive judgement. Notice that the semantic function of *I'm afraid* in (5) is more abstract than expressing a propositional attitude.

The further change that (*I am*) *afraid* underwent can be exemplified by (6).

(6) Benjamin Wallace: I'm afraid I have some unfortunate news for you.

(1995, Sheldon, *Nothing Lasts Forever*)

Afraid in this example does not express Benjamin's emotional reaction to the proposition or mitigate the force of his assertive judgement, but expresses his speech attitude of modifying the manner of presenting the proposition to the hearer. This function of *I'm afraid* is comparable to the *although*-clause in (7).

(7) *Although this may be unpleasant to you*, I (dare to) say . . .

I will propose that in (6), the semantic function of *I'm afraid* has shifted from mitigating the force of assertive judgement to modifying the manner of presenting the proposition to the hearer. Notice that the semantic function of *I'm afraid* in (7) is more abstract than mitigating the force of assertive judgement.